

【表現学関連分野の研究動向】

日本文学研究(古典)

森田 直美

近年の古典文学研究界が総体として力を注いでいるテーマのひとつに、古典文学教育が挙げられる。先細り必至の古典文学界を見据えて待ったなしの課題と言え、これに携わる一人ひとりが意識と関心を保ちながら連携し、学び合った知見を各現場で表現・体現する必要がある。国語教育と重なる点もあるかもしれないが、これを視座として2023年に刊行された学術論文・著書を紹介したい。

この課題下において、吉野朋美・小林ふみ子「コロナ禍における高・大・院・社会人連携古典文学ワークショップの試み—日本文学アクティブラーニング研究会主催第6回オンラインワークショップ「妖怪総選挙」実践報告—」(『中央大学文学部紀要』第294号、2023年2月)は極めて啓発的である。コロナ禍を受け、zoomを用いて「妖怪」をテーマに行われた事前学習・WS・フィードバック等の実践報告から、さまざまなヒントやアイデアを得ることができる。WSや授業を実施する上でのオンライン活用方法という視点でも、大いに参考となる。

また、シンポジウム報告「古典文学の伝え方—「現代語訳」の方法を考える—」(『文学・語学』第239号、2023年12月)からは、古典文学教育に不可欠である現代語訳を多様な観点から考え直す機会を得た。中でも特に、逐語訳に関する検討を軸とする、富岡宏太「ことばをくらべて考えるための「現代語訳」」には、思考の転換を促された。逐語訳には、現代語としては不自然な表現が生じやすいという欠点があるため、意訳や注釈的な訳を交えて調整される場合が多い。しかし同論では、その不自然さを通してこそ発見できる古代語と現代語の性質の違いを明示し、教育現場における逐語訳の有益性を説いている。同シンポジウム報告から他に、福家俊幸「『更級日記』の現代語訳—江國香織訳を中心に—」も紹介したい。ここではまず、江國香織訳(池澤夏樹=個人編集 日本文学全集03『竹取物語/伊勢物語/堤中納言物語/土左日記/更級日記』、河出書房新社、2016年)と島内景二訳(『新訳 更級日記』、花鳥社、2020年)の特徴を比較し、原文に補足的情報を極力足さない前者と、背後・周辺情報を豊富に盛り込む後者の差異を示している。その上で、教科書的な口語訳とともに、多種多様な現代語訳や翻訳、さらに翻案小説などをも併用したアクティブラーニングの可能性にまで言及が及ぶ。

最後に、和歌の教授法という点から、川村裕子編『拾遺和歌集』(ビギナーズ・クラシックス日本の古典、角川ソフィア文庫)を挙げたい。和歌の入門書としてはもとより、解説の口跡から周辺知識の提示加減に至るまで、実践的な教育法の指南書としても同書から得られる学びは大きい。文法や語彙の習得に加え、和歌は前提とすべき約束事が多く敬遠されがちである。その和歌と初学者の間をどう取りもてばよいのか試行錯誤する教育者にとって、ロールモデルとなりうる一冊と言えるだろう。

(明治大学)